平成３０年度 第１回 にかほ市総合教育会議 会議録

１．期　　日　　平成３０年１１月２日　金曜日
２．場　　所　　象潟庁舎　２階　大会議室
３．開　　会　　午後３時００分
４．閉　　会　　午後４時４１分
５．出席委員　　市長　市川　雄次　　教育長　齋藤　光正　　教育委員　佐々木　郁子
　　教育委員　小松　雅子　　教育委員　伊藤　知

６．事務局および説明のための出席者
　　教育次長　齋藤　隆　　総務部総務課長　佐々木　俊孝
　　教育総務課長　池田　昭一　　学校教育課長　菊地　新吾
　　生涯学習課長　加藤　淳子　　文化財保護課長　齋藤　一樹
　　白瀬南極探検隊記念館長　阿部　和久
　　教育総務課　教育総務班長　相馬　央
　　白瀬南極探検隊記念館　記念館班長　石船　清隆

７．案　　件　　（１）小学生の教育留学事業について
　　（２）池田修三賞版画コンクールについて
　　（３）白瀬矗・南極フォーラムについて
　　（４）思い出の校歌を歌い継ごうプロジェクトについて
　　（５）その他

【開会　午後３時００分】

〇事務局（佐々木 総務課長）

本日は、ご多忙のところ会議にご出席いただきまして、ありがとうございます。予定の時間となりましたので、これより平成３０年度第１回にかほ市総合教育会議を開会いたします。

開会にあたりまして、市川市長よりあいさつを申し上げます。

〇市川 市長

本日は、教育委員の皆様には、ご多忙のところご出席をいただき、誠にありがとうございます。

また、皆様方には、日頃から学校教育や生涯学習、あるいはスポーツ振興など、各方面においてご尽力いただき、心から感謝を申し上げます。

さて、新教育委員会制度のもと、平成２７年に設置いたしました総合教育会議でありますが、今回が通算４回目の会議となります。

私は、初めての会議ではありますが、少子高齢化が進む中、にかほ市の子供たち、あるいは社会人の多くの皆さんの教育環境の充実を図りながら、皆様のお力添えをいただき、私も教育行政に頑

張って参りたいと考えておりますので、よろしくお願いいたします。

開会にあたりまして、簡単ではありますが、挨拶とさせていただきます。

○事務局（佐々木 総務課長）

それでは、次に齋藤教育長よりあいさつをお願いいたします。

○齋藤 教育長

それでは、教育委員会を代表いたしまして、一言ごあいさつ申し上げます。

今、ＴＤＫ歴史みらい館で齋藤憲三さんの生誕１２０年の記念展が行われております。その会場に行ってみましたが、齋藤憲三さんの生の声を聞くことができました。そして、ＴＤＫの部品が組み込まれた家電等が、時代の流れとともに並べられておりました。その生の声と齋藤憲三さん、そしてＴＤＫが開発した部品というものは、その時代の変革を支えてきたということが、しみじみ感じられました。

また、先日の新聞では、トヨタ自動車が新たな事業展開で、情報通信企業との連携が必要だという捉え方で、携帯電話のソフトバンクと提携を結んでおりました。そして、提携の事業目標に地域活性化への貢献を掲げておりました。このように企業そのものが、地域活性化の貢献を目標に掲げていることで、今注目されているように感じました。企業というものは、常に時代の変化への対応を求められているように感じますし、ＴＤＫの歩みやトヨタ自動車の挑戦がそれを物語っているように感じました。ＴＤＫの歩みとかトヨタ自動車の挑戦に共通して言えることは、「変化を重荷と捉えず、チャンスに変えていく前向きな発想」と捉えておりました。「変化を重荷と捉えず、チャンスに変えていく前向きな発想」この言葉を聞いた時に、私は教育委員会も教育行政も企業と同じにはなりませんが、企業と同レベルでなくても、時代の変化をチャンスと捉えながら前向きに挑戦していくという私たちの姿勢が、これから大事になっていくのではないかと思いました。それが、市川市長が我々に求めているプラス１（ワン）と捉えていただきたいと思うし、そのように繋げて行きたいと思います。

そこで今回は、プラス１という視点から各部署の４つの提案をしていただき、予算も絡みますので、市長の考えをお聞かせいただければ、具体的に進めていきたいと思いますので、宜しくお願いいたします。

○事務局（佐々木総務課長）

皆様のお手元に会議の次第とともに委員名簿をお配りさせていただいておりますが、本日、このうち教育委員の吉泉聡さんから都合により欠席の連絡をいただいておりますので、ご報告申し上げます。

次に、本日出席しております事務局並びに説明者の職員をご紹介いたします。

～各出席者を紹介～

それでは、これより案件の協議に入ります。進行につきましては、にかほ市総合教育会議設置要綱第５条の規定によりまして、市長が会議の議長となりますので、ここからは市川市長が進行いたしますので、よろしくお願いいたします。

○議長（市長）

それでは、早速ではありますが、協議に入らせていただきますので、よろしくお願いいたします。(1)の「小学生の教育留学事業について」を議題といたします。事務局より説明をお願いいたします。

○菊地 学校教育課長

資料により説明

○議長（市長）

ただ今、事務局から説明がありましたが、小学生の教育留学事業について、委員の皆様からのご質問、ご意見、確認事項などありましたらご発言をお願いいたします。

○伊藤知 委員

小学生の教育留学事業、いいと思いますけれども、はじめに気になったのが、にかほ市グリーンツーリズム、里山事業も行っています。担当課が違うだけで、それとほぼ同じ様な事業であります。それをどのように捉えているのかが一つ。それから二つ目、課長から「いずれは、スポーツセンターも使えるのではないか。」という話もありました。県の事業では、「民泊も有り」と記載されています。民泊、あるいは「はまなす」を使う手立てはないのか。どうせ市からの持ち出しがあると言うことであれば、公共施設を使った方がよいのではないか、というのが一つ。それから北秋田市、八峰町、東成瀬村で行った実績について。事業をやったけれども効果がなかったということであれば、はやりの言葉に乗る必要はないと思います。この３年間で実績がどのくらいあったのか。知る限りでお知らせ願えればと思います。

○議長（市長）

それでは、ただいまの質問にお答えをお願いいたします。

○菊地 学校教育課長

グリーンツーリズムとの関連ですけれども、大きな違いは、授業体験を主とするということです。２点目、民泊、「はまなす」については、金浦小学校を考えた場合、徒歩で通学できる範囲と考えたところですが、バスを使えば「はまなす」も可能だと思います。民泊ですけれども、受け入れ家庭の募集に苦慮するのではないかと思いますし、もし夜に何かあった場合、受け入れ先に負担がかかるのかと思いますが、可能性としては残しておいてもよいと思います。３つ目、実績につきましては、県の担当に聞いたところ、人気のある事業であることは間違いないと思います。そして、リピーターがいるということでした。それが直ぐに、人口増とか観光客の増加に繋がっているかは、はっきり聞いてはおりませんので、何とも言うことはできません。

○伊藤知 委員

小学生の教育留学事業は、授業体験だといいつつも、県で言っているこの事業の目的は、将来的に家族ぐるみでの移住、定住です。このことは、グリーンツーリズムも目的は同じですよね。

先ほど課長が言った子どもさんだけでなく、親御さんもということであれば同じような事業に感じるのですが、グリーンツーリズムを今後もにかほ市で継続するのか、グリーンツーリズムと教育留学を並行していくのか、並行する必要性があるのか。そこを考えていかないとなかなかできない事業だと思います。再度、考え方をお願いいたします。

○菊地 学校教育課長

グリーンツーリズムは、夏休み限定の事業であるということと、対象が港区に限定されていると言うことであります。こちらの事業との明確な違いというのは、授業体験をすることによって秋田の学校教育を売りにした事業にしたいということであります。対象につきましては、将来的にはフリーで募集したいと考えておりますが、県の事業に乗っかれば首都圏が対象になります。まったく県の事業に乗らないのであれば、始めは連携している大阪等をターゲットにして呼びかけをして、ゆくゆくは全国に広めていきたいと考えております。いずれ授業をメインにした体験というところが趣旨であります。

○伊藤知 委員

県の方では、期間を１週間、１ヵ月、１年と区切っています。菊地課長が言う、授業がありますよと。こちらの夏休みが終わって、首都圏の夏休みが終わる月末までの１週間しかない訳であります。その中で、授業を体験させるということですけれども、何時間体験させるのか。将来的に１週間ではなくて、１ヵ月とか１学期とか、そのような形で事業を展開していく考えがあるのか伺いたいと思います。

○菊地 学校教育課長

最初は、受け入れる方も大変かと思いまして１週間としたところもある訳ですけれども、先ほども申しましたように、島根県の海士町の例を見ますと１年間留学して、継続して２年目も留学している親子がいるということを考えると、不可能ではないと思いましたので、短期から始めて、少しずつ期間を延ばすことも視野に入れていければと思います。

○議長（市長）

他にございませんか。

○小松雅子 委員

金浦や仁賀保は外からあまり人が入って来ないので、クラスの中が固定された状態なので、子供たちにとって他から知らない子が入ってくるということは、とても刺激になって良いことだと思います。ただ１年のうち２日というのは少ないと思いますが、これをとっかかりにして段々日数を増やしていく計画だとすれば、２０人でなくても１人２人でもいいので、何年か掛けて増やしていく方が良いのではないかと思います。この事業は、いらっしゃる子供さんもそうですが、受け入れる側も、子供にとっても、とても良い刺激になるのではないかと思います。

○議長（市長）

他にございませんか。

○佐々木郁子 委員

私の町内に種子島からお嫁さんに来られた方がおりまして、種子島にもこのような１年間の体験留学があるようで、応募した子供さんがとても気に入って、３年生から６年生まで期間を延長して留学している子供さんがいるようです。大阪の子供さんなのですが、中学生になったら帰るのかと思うのですが、現在４年目という子供さんがいるようです。昨日、種子島のお嫁さんから、このような話を聞かせていただきました。やはり自然が雄大で、雰囲気がゆったりしているのが気に入って、帰りたくないと言っているようです。また、東京から観光で来られた看護師の方ですが、あまりにも自然が美しいので、一旦東京に帰って、仕事を辞めて直ぐに種子島に行ったということです。仕事が看護師なので、移動先でも仕事があるのだと思います。きっかけがあればこのように移住する人もいるので、にかほ市にもこのような刺激があっても良いのではないかと思いました。

○議長（市長）

他にございませんか。

○市川 市長

対象が小学生のようですけれども、小学生の学年は限定ですか。１年生から６年生ですか。それから人数が２０人の予定ですが、一つの学校からですか。それとも複数の学校からですか。

○菊地 学校教育課長

県からは、逆に学年は何年からにしますかと聞かれました。１、２年生だと小さくて厳しいので、３、４年生からではないかと答えたら、他の市町村ではフリーだということでした。ただ、受け入れる側の問題もありますので、１学年２０人は無理だと思います。金浦小学校だとすれば、多くて１学年５人くらいと考えております。いっぱい申込みがあれば抽選するしかないと思います。

○市川 市長

先ほど伊藤知委員が言っていましたが、グリーンツーリズムで来ている子供たちがマンネリ化していて、子供たちの目が死んでいるという人がいました。そのようになってはいけないので、この事業を仮に始めるとしても期限を区切って、３年なら３年でやめる。３年で見直しをして形態を変えて皆さんが言っているように期間を延ばすとか、県の事業に乗らず直接大阪の子供たちを対象にするとか。一つの形に固執することがないようにしていただければ、私としてはいつも言うように、事業には必ず終期を付けるように、必ずローリングするようにしていただければと思います。やり始めたらダラダラと続けると先ほど言ったようなグリーンツーリズムのようになってしまうので、そこのところはしっかりとお願いいたします。

○議長（市長）

他にございませんか。無いようですので、今日、出された意見等を参考にしながら担当課で再度検討を行いまして、実施計画等に載せていただければと思います。

○議長（市長）

それでは、(2)の「池田修三賞版画コンクールについて」を議題といたします。事務局の説明を求めます。

○齋藤 文化財保護課長

資料により説明

○議長（市長）

ただ今、事務局から説明がありましたので、委員の皆様からのご質問、ご意見等をお願いいたします。

○小松雅子 委員

今回は、多色刷りが基準だったのですか。

○齋藤 文化財保護課長

今回は、多色刷りの彫り進み版画で行いました。

○小松雅子 委員

版画の授業は、５、６年生で何時間くらいありますか。１０時間もないですよね。

○菊地 学校教育課長

そうですね。

○小松雅子 委員

だとすると、多色刷り版画をみんなに出させるとなると先生方に負担が掛かるし、子供にも負担が掛かると思います。もし、どうしても実施するということであれば、授業の範囲でできる多色刷りを基準として、夏に尾崎先生をお呼びして夏休みにワークショップのような形で全市の子供を対象に希望者を募って行ったらよいと思います。普通の子にはハードルが高くてできないと思います。自分が小学生の時、６年間学校に通って、版画は１枚しか持ってこなかったように記憶しています。その程度しか学校ではできないので、このサイズを彫ることはかなり大変なので、サイズを自由にするとか、家で彫って来てくださいとか、授業で作業したものを出してもよいとかとしないと、あまりハードルを上げすぎると取り組む子どもたちも積極的にはならないと思います。

○齋藤 文化財保護課長

今回、５年生全員が９月から尾崎先生と担任の先生に指導を仰ぎながら、図工の時間２時間、それを２回くらい行いながら、また足りない子供は放課後に作業したりして、完成させたものであります。負担があるのは分かりますが、ただ授業で取り組んで、その中でできるのであれば、出来たものの成果を発表する場にしたいと考えているのですが、いろいろと検討していきたいと思います。夏休みにワークショップを行うということは参考になりましたので、検討していきたいと思います。

○議長（市長）

他にございませんか。

○伊藤知 委員

学校に、この事業をこのように行いたいということは、説明していないと思いますが、来年度から英語のコマ数も増えますし、学校訪問の際に話をしてみて学校側で一番頭に上げているのが、この英語のコマ数をどのように確保するかということに悩んでいる状況でありました。そこで小学生を対象にこの事業を行うということであれば、先生方にかなり負担が掛かるのでないかと思います。なぜ、５、６年生にしたのか。にかほ市を版画の街として声を上げたいとすれば、別に小学生でなくても、一般の大人でもよいのではないでしょうか。なぜ、そのような形で考えられなかったのか。どうして５、６年生が対象なのか。そこをお伺いいたします。

○齋藤 文化財保護課長

５、６年生を対象にしたのは、先ほども申し上げましたとおり、彫り進み版画に取り組むのが５、６年生であるということでありまして、改めて授業以外で行うとなると、負担が大きいのではないかと思いまして、授業で取り組んだ物を対象に行えれば良いのではないかと考えたところであります。状況を見ながら、中学生、高校生、一般とか考えていければ良いかと考えていたところであります。

○佐々木郁子 委員

今、大変という声がありましたが、どのようにしたらうまく行くかということを考えた方が良いのではないかと思います。今、学校では、コミュニティスクールとして地元の方々を巻き込んで、協力をいただきながら進めていこうという考えがありますので、一般の方でも版画、美術関係で優れている方が地元にいると思うので、その方々の協力をいただきながら行うとか、やり方はいろいろあると思います。にかほ市の歴史人、著名人（池田修三）を打ち出して行おうとする事業ですので、子供たちの心に残るものをということで考えたのかと思いました。なんとか成功できるように考えていただきたいと思います。一般の方の協力をお願いしてもよいと思います。

○齋藤 文化財保護課長

実は、象潟公民館でも版画教室を行っておりますので、そのことも含めまして考えていきたいと思います。ただ、彫り進み版画と一般の方々が行っている版画とは違うところがありまして、

今回小学生に限らせていただいたところであります。深い意味で、広い意味で版画の街ということで発信していくと言うことであれば、小学生に拘らず再検討して参りたいと思います。

○議長（市長）

他にございませんか。

○菊地 学校教育課長

学校教育課では、にかほ地域学に取り組んでいまして、計画も固まって実践されております。その中に象潟小学校の例でありますけれども「池田修三にチャレンジ」と言うことで、にかほ地域学として取り組んでおります。これは、総合的な学習の時間を充てることも可能となっておりますので、時間数に関しては、にかほ地域学の枠で図画工作と総合的な学習の時間を使えばできると思います。昨年まで学校現場にいて見ていたのですが、児童によって時間のかかる子とそうでない子がおります。しかしながら、出来上がった作品を見れば、それなりに味があっていいのかなと思っております。

○齋藤 文化財保護課長

作品につきましては、今行っております「まちびと美術館」に５，６年生の作品を全部、公会堂に展示してありますので、ぜひご覧になっていただきたいと思います。

○佐々木郁子 委員

案件から少し外れるのですが、今「まちびと美術館」のスタンプラリーが行われていると思うのですが、今日、たまたまある場所に行きましたら、２人の年配の方が来てスタンプを押していました。カードを見ると半分以上スタンプが押してありました。それだけイベントをすることによって人が動くということは、素晴らしいことだと思うし嬉しく思いました。

○齋藤 文化財保護課長

先ほど版画の街として発信するのであれば一般の人もという話がありましたけれども、私はあくまでも子供たちの作品を池田修三木版画展で紹介するような形でいきたいと考えておりますので、池田修三さんの版画と合わせて子供たちが取り組んでいる姿をコンクールで紹介していければと考えております。

○市川 市長

コンクールを実施し、彫り進み版画をするとなるとにかほ市内の子どもはやれると思いますが、コンクール形式にしてのちのち市外の子どもたちからも応募してもらうとなると、そこは厳しいのではないかと思います。多色刷りのものと単色刷りのものを分けて審査するとかにならざるをえないのではないかと思いますので、もう少し検討を加えていただいて、最初からハードルを上げなくてもいいのではないかと思います。先ほど小松委員からもお話がありましたように、ワークショップを使って多色刷りの完成度を上げるという方法もあると思います。子どもたちの処女作がそのままコンクールの出品作品にならざるをえない訳です。絵画なら何回か人生の中で描い

ていて５、６年生の時になればかなり良い作品が描ける。版画の場合はテクニックが厳しいと思います。もう少し検討してください。

○議長（市長）

他にございませんか。無いようですので、次の案件、(3)「白瀬矗・南極フォーラムについて」を議題といたします。事務局の説明を求めます。

○阿部 白瀬南極探検隊記念館長

資料により説明

○議長（市長）

ただ今、事務局から説明がありましたので、委員の皆様からのご質問、ご意見等をお願いいたします。

○小松雅子 委員

１枚目の資料の４の会場というところに、にかほ市と秋田県内の施設とあるのですが、人数はどれくらいの集客、規模を考えているのでしょうか。また、県内の施設というのは具体的にどこで、市内の施設とは具体的にどこでしょうか。企業ブースも入れるとすれば、南極記念館では全然狭い訳で、市内で考えると象潟体育館くらいしかないのではないかと思います。例えば規模的に大館の樹海ドームを使うくらい集めるのか。それとも少し小さく分会場という形でやりたいのか、規模が分からないので教えてください。

○阿部 白瀬南極探検隊記念館長

今現在、規模としては、県内の市町村の代表者をはじめとする方々を集めてのフォーラム、それから南極関係の先生方が集まっての情報交換会をするというところまでは考えております。企業ブースを設けるかということにつきましては、今後の企業への働き方しだいということもありますけれども、大型機械を持ってくるとかは考えておりません。まず、人の交流ということを考えております。

○小松雅子 委員

私の考えられる範囲でのイメージとしては、秋田のキャッスルホテルとかでやる学会のようなレベルの集まりと考えてよろしいでしょうか。

○阿部 白瀬南極探検隊記念館長

その規模まで一度でいくかは分かりませんが、小規模な先生方の集まりや地方自治体の集まりを中心に考えています。大きさのイメージは、まだはっきりしておりません。

○議長（市長）

他にございませんか。

○伊藤知 委員

フォーラムというのは、ある程度かかわっている人の集まりであって、一般的に私たちのような一般市民はフォーラムには、まず参加しない。興味のある人でないと行かない。ということを考えるとフォーラムというのは、それを知っている人の自己満足にすぎないと思います。だとすると、白瀬南極探検隊記念館の入場者数が年々減っていることを、逆にその入場者数をどのように上げていくかを考えた方がいいのではないかと思います。白瀬南極探検隊記念館には、白瀬矗の功績が凝縮されている訳ですから、一般の方々から見てもらう機会を増やすことによって、偉業、功績を人々に知らしめるという手段の方がいいのではないかと思います。国立極地研究所との連携は必要だと思いますが、あちらはあちらの方で南極に関するイベントを行っておりますし、はたしてこれを行う必要性があるのかと感じております。ならば白瀬記念館の入場者をどのように呼び込むか。同じ３００万円をかけるのであれば、こちらの方がいいのではないかと思います。このフォーラムというのがどうして出てきたのか。確かに目的は書いてありますけれども、分かりやすい目的をお聞きしたいと思います。

○阿部 白瀬南極探検隊記念館長

白瀬矗の功績を広く知らしめたいという目的が一つであります。もちろん白瀬南極探検隊記念館の入館者数を上げるということもありますけれども、白瀬南極記念館の資料の充実を図れば入館者数は増えるものと考えております。資料の内容を充実させるためには、一線の方々が一堂に会して情報交換をするという場が必要なのではないかと思い、この提案をさせていただきました。

○小松雅子 委員

お話しを伺っていますと、比較的専門的な集まりではないかと思われます。学術的な集まりにするのであれば、どなたかアドバイザーという方を置かないとこのようなフォーラムを行うことは大変なのではないでしょうか。白瀬の南極探検に照準を合わせるのか、現在の南極探検に照準を合わせるのか、それとも白瀬矗の偉業に照準を合わせるのかによってかなり変わってくると思います。学芸員を置かなければいけないレベルではないかと思いますが、いかがなものでしょうか。

○阿部 白瀬南極探検隊記念館長

学術的な面に関しては、我々が検討する中でどのレベルを目指すのか。南極探検と言っても分野がありまして、学術関係のものを開くと委員がおっしゃった様に我々の手に負えるようなものではないし、難しいと思います。白瀬矗南極フォーラムのイメージとしましては、関連する市町村の情報交換の場、あるいは学者の方が一つの分野に拘らず、南極について、白瀬矗の功績について情報交換、交流をするという目的であります。学術的なものに特化して、研究会とか学会のような形で行うものではないと想定しております。

○議長（市長）

他にございませんか。

○佐々木郁子 委員

資料の２内容の３で産業を巻き込むという話がありましたが、もっと具体的にどの様なことを想定しているのかお聞きしたいと思います。

○阿部 白瀬南極探検隊記念館長

産業を巻き込むというのは、資料３枚目のイメージ図にありますように南極観測関連企業がたくさんありまして、具体的な例で申し上げますと仁賀保高原に風力発電、南極に持っていく風力発電の実験施設が置かれているわけですけれども、このような形で関連する企業を呼び込むことによって市内の研究施設を通して関連企業を呼び込むことをきっかけにしたいと考えています。そのようなことで産業という言葉を入れさせていただきました。

○議長（市長）

他にございませんか。教育長お願いいたします。

○齋藤 教育長

根本的に伊藤知委員が言ったように入館者数を上げることに今まで努力はしてきております。しかしながら、なかなか増加しないということでのこの提案でありますが、私が長岡に出張で行って名刺交換を３０枚以上した時に、にかほ市を白瀬矗が生まれた所だと紹介したところ、誰一人として白瀬矗のことを知らなかったわけであります。それについて、私はショックを受けたわけであります。日本で最初の南極探検隊の白瀬矗を知らないということは何事かと思いました。そこで私は思ったのですが、単独で、白瀬記念館で、白瀬矗を広めて行こうとか、それを全世界、日本中に広めていくのは無理だと思ったわけです。もっと群れとして、連携して、白瀬矗、南極というものを捉えた時に、白瀬記念館をもっともっと幅広く周知できるのではないかという捉え方があったわけです。そして、今、松尾芭蕉のサミットがあります。北前船のフォーラムもあります。では、そこで何をするのか。これまで北前船も各地区で北前船に関する取組をしてきたわけでありますけれども、それが全然周知されていかない。そして、観光、地方発信に繋がっていかないということで、各地区の北前船関連の自治体が連携をとってやっているわけです。それを白瀬でもやっていくべきだと思ったわけです。つまり、今言ったように企業は勿論ですが、全国の各自治体に、白瀬の墓がある愛知県西尾市とか、南極に関係のある自治体を調べてもらって、そこの自治体と私と市川市長が中心となって連携しないかと話しかけ、その中で白瀬矗、南極というものを周知していく。そして、フォーラムをするとなれば、確かにフォーラムに関係のある人が来るわけであるけれども、記念講演とかフォーラムに関わる事業となれば、合わせてみんな来るわけであります。その際に、白瀬記念館にも足を運ぶ。そして、次に別の場所で開催する。順々に行けば、北前船フォーラムでは、５００人くらいの人が動いていく。そういうところを基にして入館者数を、リピーターを増やしていく。手がかりとしてフォーラム、サミットでもいいのですが、いずれこのような群れとして取り組んでいかなければ、今までいろいろ取り組んでも入館者数が増えなかった。私たちがこれまで努力しなかったわけでもないし、努力してもできない。視点を変えて群れとして一つのきっかけを作っていく。それを今回の提案として打ち出したということであります。企業なんかもそうであります。例えば、東光㈱は、南極に行って鉄工所

の中でやっている。この人たちとも、企業と一緒にやれば、われわれと東光コンピュータとの関係もあるし、つながりを持っていけば財政的なこととか、白瀬や子供たちとの関わりもでてくるのではないかと、今回白瀬記念館の方で提案したところでありますので、宜しくお願いいたします。

○伊藤知 委員

例えば、市長が北前船フォーラムに行っていると思いますが、どのような手ごたえがありますか。

○市川 市長

やはり北前船フォーラムは、にかほ市では２回目にフォーラムをやったわけです。１回目、２回目はこぢんまりとした集まりで、北前船についての共通認識を持っているとは言いがたかった。ところが、これだけの回数を重ねてくると、一つの大きな集団になって北前船を使って観光プログラムを作るし、北前船の関係で大連に行って国際交流も行っています。要するにコンセンサス、全体の中の認識が一致してきて一つの大きな運動になったと捉えることができます。その推進力になったのが、北前船の場合は石川好さんの新聞記事が出発点であったわけでありますけれども、ここにかほ市であれば茂木さんであったり、ＪＡＬであったり、ＡＮＡであったり、そのような方々が入ってくれたからより進んだと言えると思います。例えば、白瀬矗も国立極地研究所にとっては、大きなテーマではないわけであります。白瀬矗というのは、日本全体で見ると学術研究が行われていない。学術研究が行われているのは、にかほ市だけです。にかほ市の白瀬記念館の中では白瀬矗について地道に学術研究が行われているけれども、これは全体の運動にはなっていない。全体の運動にしなければならないのかは、にかほ市のスタンスだと思います。にかほ市がそれを望むならば白瀬矗というものをもっと全面に押し出していきたいということであれば全体の運動に関与する人たちを巻き込んでいかなければならない。そうしなければ、運動にはならないということだと思います。北前船のような大きなウエーブを起こすようなものになるかは分かりませんが、白瀬南極記念館の入館者数を増やすためには、もっと大きな運動にしていかなければその様にはならないと思います。このフォーラムを開催するという案件が出てきたときに私は、一つ検討しても良いのではないかと言わせていただきましたし、教育総合会議の中でどのような話しになるのか楽しみにしておりました。提案がまだ生煮えの状態ですので、うまく答えられないというのは分かりますが、何を目的にしていくのかをもう少し精査しながら、そのための運動形態がどのようにあるべきなのかということをもっと精査しなければ皆さんの理解を得ることは難しいのかと今聞いていて思いました。ただ、この運動としていくのか、今の局部における地道な活動でいくのか、だと思います。白瀬矗のファンは、コアな部分で結構います。でも、それが分散している状態です。それを集約する役割を誰がとれるのかと考えるとにかほ市しかいないと思います。他の人たちは、なかなかそのような意識にもならないかもしれないし、そのようなエネルギーもないし、歴史的背景もないと思います。白瀬矗というものを顕彰したいということであれば、にかほ市しかリードして行けないと感じております。白瀬矗は、にかほ市の唯一のオンリーワンですから、どのように活用していくかは、にかほ市のシティー戦略の中に一つ位置付けてもいいのではないかと思います。冒頭で館長が言ったように地方創生の中のメニューにあった

とするならば、５年間の中でやっていくべき内容だと私は理解しております。後は皆さんがどのように判断するかだと思います。

○伊藤知 委員

ただ一つ、先般、吉良町の教育委員の人たちが白瀬の墓前にお参りしていただいたわけであります。菩提寺が吉良町にあると。それから豊田市の中の文化施設の一角に南極と白瀬矗の記念館が小さいけれどもあると。その辺との連携が今、白瀬記念館としてどれくらい取れているのか。つかめていないんですよ。それがかなり密度の濃い付き合いをしていて展示資料のやり取りとか移動展示とか、そのようなことをやって白瀬の偉業というものを知らしめるという手もあると思います。ただ単に群れを作ってやれば確かにいいですけれども、自分たちでやれる範囲のものをしっかりとやって、それに対してこの群れというものが着いてくるという方法も一つだと思います。

○市川 市長

西尾市の皆さんは、私たち以上に白瀬矗に対する思いが熱いですね。この間もご一緒させていただいた時に「何かやっていかなければいけないですよね。」という話しになりました。これをやろうとした時に、真っ先に相談しなければいけないし、私たち以上に熱く語ってくると思います。だから連携するとすれば、まずは西尾市と連携して形づくりをしていかなければいけないと感じました。

○齋藤 教育長

旧金浦町の白瀬に関する事業とか意気込みというのは、今も残っているんですよね。私が教育長になった時に初めて南極観測船「しらせ」の出迎え、または出航に行った時にびっくりしたのは、「しらせ」の艦長の部屋に案内されたんです。普通、艦長の部屋に行くということはあり得ないことですし、二番目に案内されて、座席も馳文部大臣の隣でした。そのくらい白瀬に対する評価は国レベルに行けばすごく高いわけです。今まで金浦町時代はそのように対応していたかもしれませんが、にかほ市になってからそのようなレベル的なことは知らされていなかったのではないかと思います。にかほ市に対する対応が考えられないくらいすごいです。極地研究所に行ってもフリーパスで「よくいらっしゃいました。」と大歓迎されます。南極のＯＢの方々も「よくいらっしゃいました。」と歓迎してくれます。あの歓迎ぶりというのは、ここにいては分からないことです。現地に初めて行って分かる。でも、あの方々もＯＢの方々も極地研究所も海上自衛隊の方々も白瀬矗ともっともっと関わりを持ちながらやっていきたいということが出てくるのですが、誰がやっていくとなれば、今まで口を出すところがなかった訳です。だからにかほ市が、極地研究所と組んで、そして吉良町や関わりのある自治体等と結びつきを持ちながら、もう一度白瀬矗というものの価値を見直していこう。白瀬矗だけだと限られてくるので、南極の観測という捉え方とか、あとは「ふじ」や「宗谷」などの南極観測船に関係のある方々と関わりを持ちながら白瀬矗を広めていくという捉え方をすれば、旧金浦町がやってきた努力そのものが実ってくるのではないかと思います。だから金浦の顕彰会の皆さんは話をするごとに、にかほ市の対応の仕方に満足していない部分があったと思います。それではいけないので、脈々と旧金浦町がやってきたも

のをにかほ市になったからと言って軽く扱うのではなくて、更にそれを踏まえながら広げて高めていくことによって顕彰会並びに旧金浦町の努力というものが実っていくのではないかという捉え方をすれば、何か一つのきっかけとしてやらなければいけないのではないかと考えて、教育委員会から提案しました。

○市川 市長

皆さんが思う以上に、国内では白瀬矗に対する評価は高いです。本当に、今言われたように歓迎を受けますし、国立極地研究所に行って南極観測隊ににかほ市から１名出させてくださいとお願いしました。これについて、いきなりだから厳しいと。普通であればこの話は受けてもらえない。だけどにかほ市だからと面接に行った職員もいる。今回は難しいと思いますが。このような取組ができるのは、白瀬矗がいるからです。この白瀬矗の価値を今までにかほ市は重要視して来なかった。ないがしろにしてきたのではないかと私は思っております。私たちは再認識をしながら進めていく、後世に伝えていくべきものだと思っていますので、それをどのように、今のまま地道に行くのか、あるいは、ビッグバンではありませんが、拡大していくのか。このようなことでの提案だと私は話を聞かせていただきました。私たちが思っている以上の白瀬矗の評価は高いと思っております。

○議長（市長）

他にございませんか。無いようですが、この案件、もう少し課の方で精査してください。よろしくお願いいたします。次に、案件、(4)「思い出の校歌を歌い継ごうプロジェクトについて」を議題といたします。事務局の説明を求めます。

○生涯学習課長

資料により説明

○議長（市長）

ただ今、事務局から説明がありましたので、委員の皆様からのご質問、ご感想等がありましたらお願いいたします。

○全委員

なし。

○議長（市長）

案件は全て終了しましたが、その他何か事務局からありますか。

○事務局（佐々木総務課長）

特にございません。

○議長（市長）

それでは、案件についての協議はすべて終わりましたので、これで議長の任を解かせていただきます。

○事務局（佐々木総務課長）

ありがとうございました。

今後の総合教育会議の開催予定についてでありますが、今のところ予定はございません。協議事項が発生した場合には、その都度お知らせいたしますので、よろしくお願いしたいと思います。

それでは、これをもちまして平成３０年度第１回にかほ市総合教育会議を閉会いたします。

【閉会　午後４時４１分】